

春日大社 概要

春日大社は、古都・平城京を守護する神々を祀り、これを崇拝する目的で 1250 年以上前に創建されました。奈良時代（710－784）、奈良は日本の首都であり日本文化の中心地として栄えました。日本における数多くの芸術、食文化、政治がここ奈良で形成されたのです。

奈良時代初期には、茨城県鹿島神宮に祀られていた神様・武甕槌命（雷の神）が、平城京の安寧への願いを聞き入れ、白鹿に乗って神山御蓋山山頂に到着したという話が残っています。こうしたことから御蓋山は神聖なる場所と考えられており、古来より人の入山は許されていません。毎日山頂に登ることなく祈りを捧げることができるよう、春日大社は山の中腹に建てられました。春日大社は、古都の東に位置し、日の出を望む方角にあります。

春日大社では、次の四柱が祀られています。武甕槌命（雷の神）、経津主命（剣の神）、天児屋根命（知恵の神）、そして、比売神（天児屋根命の妻である女神）です。

仏教徒はこれらの同じ神々を、それぞれ釈迦如来（釈迦）、薬師如来（医学と癒しの仏）、地藏菩薩（衆生を救う仏）、そして十一面観音（慈悲の仏）として崇めて参りました。

平安時代(794-1185)以降、藤原氏と深い関係にあった近隣の仏教寺である興福寺の僧侶たちは、定期的に礼拝の儀式を春日大社で行っていました。

この神社は、奈良時代に朝廷の要職にあった藤原氏によって創建されました。藤原氏は、平安時代に日本の政治を統治していた 4 つの有力氏族の内の一つです。藤原氏の紋章に藤の木が使われていたため、春日大社の紋章となっています。また、春日大社は藤の木が有名です。

今日まで信仰の続く春日大社では、広大な土地と神聖な社殿に加えて、日本でも有数かつ保存状態のよい石灯籠と釣灯籠が見られる場所でもあります。さらに、国宝殿には貴重な平安時代の美術品が所蔵され、20 種 200 本もの藤が見られる萬葉植物園もあります。